俺の教室には吸血鬼（偽）がいる

革新家の核心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の教室には吸血鬼（偽）がいる

【Ｎコード】
Ｎ４１１３Ｙ

【作者名】
革新家の核心

【あらすじ】
高村悠。
峻嶺学園に入学したての高校１年生。
斎垣鶸。
峻嶺学園に入学したての自称吸血鬼の女の子。
吸血鬼が作り上げる「神話研究部」でちょっと怪奇でユーモアな日常が繰り広げられる？！
『人間』と『吸血鬼』は果たしてどんな一日を過ごすのか。
そんな俄かにはあり得ない学園生活を覗いてみませんか？

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０「吸血鬼との残念な出会い」（前書き）

たまにパロディが出てきますがあまり気にせず読み進めてください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０「吸血鬼との残念な出会い」

人類は怠惰の生き物である。
事実。
人間は時代を歩むとともに周囲に被害を与え、自らが失墜することを知っておきながらも黙認している。
恐竜などと比較すると人類史は非常に短いものとして終了することになるだろう。
だが、そんな愚鈍な生物にも数少ない成功を収めた例がある。

それは言葉だ。
言葉により歴史は紡がれ、今へと伝えていく。
それによって残された数々の散逸した書物がある。
それは誇大妄想に過ぎないなどの批判を被るものもいくつも存在するところだがそれでも読者には最高の魅力を感じさせる事だろう。

だけれど国語の授業は嫌いである。
只今、黒板との睨めっこ、もとい睡魔との脳内戦争が繰り広げられている。
イングランドやスコットランドなどの神話にみられるフェアリーのような感じの女の子が俺の周りに飛び交っている。たまに俺に触れてくるがその優しい温もりが余計に俺を眠くさせる。

結果から言おう。
その授業は開始5分で俺は戦争に敗北し、次の放課まで使って盛大に眠っていた。
およそ６０分の睡眠。昨日６時間も寝たのになぁ。
などと、どうでもいい事を寝ぼけ眼で考えながら黒板の記号の羅列をノートに転写していく。

字はまさにミミズが這ったというか涎が少しついていてナメクジが這ったかのような凄惨な状況に陥っている最中、いきなり後頭部に衝撃を感じる。
「うっぐ。・・・・いった・・・・・」
振り返るとそこには夢現の中で見たフェアリーよりも美しい「人間」が慇懃無礼な感じに立っていた。
「ちょっとついて来て」
つまらなさそうというかかなりご機嫌斜めな感じでぶっきら棒に複合単語を発する。
人間と表記し難いまるで人間のそれとは異なったほどの端正な顔立ちと綺麗な髪であった。
「・・・・なんなんだよ・・・・・」
渋々ではあったが見ると昼放課でかなり余裕もある時間帯だったのでついて行った。
口の中が少し鉄の味がする。
叩かれたときに舌噛んだもんな～などとどうでもいい事がまたまた脳内再生された。

教室から出て廊下の曲がり角。
天窓が設けられており心地いい日光が差し込む。
当然そんな良い環境下には人が集まる。
「リア充は死ね！！！！」
そう、ここにはカップルが集まるのだ。校内デートスポットだ。
気まずさなどの羞恥心をすべて投げ捨て周囲の視線など気にかけず、乳繰り合っていやがる・・・。
当然そんなところには一般人は寄り付けるわけもなく、カップルの巣窟と化しているのだ。
俺よりも頭一個以上小さな彼女が腰ほどまで伸びている長く綺麗な髪を大きく揺らしながら怒号を発した結果、奇異の視線を向けながら彼らは去って行った。

「まったく、学校にまで蔓延りおって羽虫どもめが」
片手で片手間に乱れた髪を調える様がとても綺麗だった。
「お前、すげぇな」
クラスが一緒ではあったがろくに彼女と会話をしたことがなく、いうなれば初対面であったにも拘らず感嘆の声を俺は上げていた。
「ん？何がだ？」
心底不思議そうな顔でこちらを見上げてくる。うん、こいつただ者じゃないな。
「普通、あの種のリア充に声を荒げることはしないぞ？」
苦虫でも噛み潰したかのような顔をしながら彼女は矢継ぎ早に口を開く。
「あのような羽虫どもが蔓延るせいで耳目の毒だわ、見ててこっちがイライラするわ、何の得もありゃしないじゃない。だから成敗したのだ！というわけでお前を呼んだのは他でもない。神話研究部に入らないか？！」
脈絡ないなー。
というわけでこの俺、ごくごく普通の一般高校生（非リア）こと高村悠はクラスというか学校中で浮いている斎垣（イガキヒワ）鶸と出会った。

峻嶺学園。俺が今年から通うことになった私立学校。
授業料など、どんな金額を見ても公立と大体同じもしくはそれ未満であることと部活動に尽力していることから近年非常に人気があるのだ。というか入学してからわかったが校舎やら部活棟やらが綺麗過ぎる。音楽室とか特殊教室に最新鋭のお掃除ロボットとかいたし・・・。
一台３万くらいするんじゃなかったか？
創立６０年とは思えないほど煌びやかである。

斎垣鶸。
俺と同じ１年Ｃ組のちょっと背が低く、異様に端正な顔立ちの子だ。

ザ・左右対称みたいな感じ。
その見た目だけで女子から反感を買い、尚且つ謎のキャラが確立されてしまっているのでクラスではとっても浮いていた。いきなり私は吸血鬼だなんて宣告しないだろうに。
そして俺はそんな彼女と廊下でおしゃべりをしている。
「日本語でおーけー」
「ふん、貴様の左脳はどうやら魚肉ソーセージのようだな。ふっはっは！それならば、妄(わらわ)が直々に丁重に教えてやるわ」
一人称が江戸時代の頃のものになったのと、脳をすごい比喩されたのはどこかにおいておこう。
フライ・アウェーイ。
彼女はポケットから綺麗に折りたたまれた紙を引っ張り出し、広げる。
そこにはこう書かれていた。

～妄のもとに集え愚鈍なる愚民ども！ともに歴史を紡ごうぞ！～

あと下には結構下手糞な謎の絵が書かれていた。
「・・・お前何様なのよ・・・。この絵なんだ？」
最初の一言は小声で言い、この絵の真意を探る。
「ん？最初の方が聞き取れなかったがまぁ良かろう。この絵は吸血鬼が描かれておる」
どうや！みたいにびしっとその紙切れを突き出してくるが俺はまずこれが人間だと認知できなかったぞ。かの有名なゲルニカとムンクの叫びを足して神秘性を差し引いたような感じだ。
つまり下手くそな絵である。
「唖然とするのも仕方あるまい。何せあのｐｉｘｉｖｉａで『神キタｗｗｗｗ』『何これ美味しいの？ｗｗｗｗ』『最近の絵師は訳がわからないお（，・ω・、）』と賞賛の言葉を浴びに浴びまくっているからな！」

どうやらこいつの脳内フィルターを通過するとどんな言葉も賞賛になるらしい。
「そいつぁ、すごい」
物凄く適当に返事したのを見抜かれて、「どうだお前も妾と共に歴史を紡ぐことに魅力を感じただろう。ん？ふふ。皆まで言うな。うぬが答えは既に出ておる。」
「いや誰も何も言ってない」
見抜かれていなかった。
「そうだな、無言でも我らは意思の疎通ができるというわけだ。そこまで気が合うのなら乗りかかった船だ。妾についてくるが良い」
「神話何とかには入らないしお前少しは人の話し聞けよ・・・・」
俺がため息混じりに言ってやると彼女はさっきまでどこかに行こうとして向けた足を急旋回させこっちに向かってくる。そして俺の学生服の袖を掴む。
「何で？！何ゆえに妾についてこないのだ？！妾では不満か？足りぬのか？！脱げば満足するのか？！よし待ってろ今すぐ妾の生まれたときの姿になってやろう！！」
「脱げばいいってもんじゃない！！」
いきなりセーラー服に手をかけた彼女に俺は自らの貞操観念に危機を感じ俺からでは頭頂部の綺麗な右回りのつむじが丸見えのその頭に拳を一発プレゼントする。
「はぅっ？！・・・いたぁいぃよぉ・・・・・」
頭を押さえながらこちらを少し潤んだ瞳で睨んでくる。
その姿に少し見惚れてしまっていた。
「うぅ、許さぬ！わた、・・こほん、妾の高貴なる体に触れるとは何事ぞ！夜の眷族の恐ろしさをここに見るがいい！！」
ごめん前言撤回。
ここまで気付かなかったけどこいつの頭のなか中世の電波がびりびり迸ってるわ。
そして彼女が懐から取り出した何かで俺もビリビリになった。

なんでスタンガン携帯している女子が学校にいるんだよ・・・・・・。
白濁の意識から少しずつ上方に意識が浮上する。
「・・・うごっ」
腹部がぴりぴりと痙攣した。
「ふふふ、目が覚めたか愚図め。妾に畏怖(いふ)を為し平伏すがいい」
「何でスタンガンなんて持ってんだよ。てか人に向かって使うな」
いきなり尊大な態度に出た彼女に不平不満をぶつける。
「一度あのスタンガンなどというＡＭＡＺＯＮＹで１万もしていたのを使ってみたかったのだ。それに人類が如何程に進歩したかにも些か興味があったのでな」
「吸血鬼ならおとなしく血を吸っててくれ・・・・」
「それにしても人類の耐久力というのは全く持て悲しいな。ミジンコ並ではないか」
君も立派な人類だよ、と内心で毒づく。
中世電波爆発の彼女の発言にどっと疲労し体の体重を背に預ける。
ふかふかした材質のところに横たわっているかと思ったら俺はソファーで寝ていたようで、どこかよくわからない謎の部屋にいた。
「ここ、どこだ？」
中世電波さん（以下、中電）が不敵な笑みで応える。
「ようこそ、妾の知識の社(やしろ)へ！」
電波に侵略されないように中電を意識せず、周囲を見渡す。
考古学者の研究室とかにありそうなものすごく年季の入った本がいくつも並んでいる本棚やら、タイトルなどは判りかねるがＡ４サイズの薄っぺらい本がぎっしり並ぶ棚、文庫が鎮座した棚など本まみれであった。
「すごいな、本まみれだ」
「ふふふ、我の知識の結晶に驚愕を「どんな本があるんだ？」
意図的に彼女に台詞をさえぎる。
「ふん、仕方なく貴様など低俗なものにもこの崇高なるユートピア

の書物たちを拝見する権利をくれてや「へぇ、歴史書か～、お、こっちは、何ゆえラノベ・・・？」
意図的に遮る、パート2。
そしてなぜか文庫本はほとんどがラノベであった。
「うぅ、わたしのはなしちゃんときぃてよぉ。なんでむしするのぉ～」
妙に母音が伸ばされて幼児語のような台詞が聞こえたので音源を探るとさっきまで高慢無知な感じだった子が泣いていた。仕方ないのでどうして泣いているか聞いてみることにした、多分に俺のせいだろうけど。
「どうして泣いてるの？」
「うぅ、おまえがむししたぁ～」
「そっか、ごめんね。ちゃんと話を聞いてあげればよかったね」
「あぅ、ちゃんと話し聞く？」
「うん。だからもう泣くのはやめよっか？」
「うん！」
なぜか子供の扱いが達者な自分に身震いしたが、中電さんはキャラが案外確立できていないようであった。この短時間で結構ぶれている。
というか高校生にもなって鼻啜りながらダイナミックに泣きじゃくるなよ。可愛いだけじゃねぇか。
実際、彼女の挙止挙動はどれも様になっている。
「そういや、いま何時だ？」
「ん？時計ならそこの壁にかかってるよ？」
指差された方を見やると5間目が終了にさしかかろうとしていた。
「って、おい！授業どうするんだよ！」
「はぅ！・・えぇっと、・・くくく。偉大なる夜の眷属であり、悠久の時を過ごした妾には些末な事よ・・・」
途中からキャラがぶれていることに気付いたのか、露骨に焦燥感を表して軌道修正をしていた。

「はぁ、登校2週間でサボりかよ・・・・」
「だからそのような些末な事でこの世の顛末は変わりはせぬ。案ずるな我が同胞よ。学校での猥雑(わいざつ)で乱雑な知識の変わりにこの妾自身が素晴しき知識を分けあたえてやろうぞ・・・」
「そこまで悠々自適なところ見せ付けられるとどうでも良くなってきたよ」
「ところで貴様、名をなんと申す」
今更かよ、などと思いながらも仕方がないので答える。
順序って大事だと思います。
「俺は『人間』の高村悠だよ。・・・お前は？」
「くくく、妾は夜の眷属にして偉大なる神祖『吸血鬼』だ。この仮初の世では斎垣鶸という名を使っておる。真名は、デルラント・シスキン・雅(ミヤビ)だ」
物凄くディティールの凝った設定に嘆息を交えて俺は歴史を作った偉大なる言葉を発す。
しかも本名の「鶸」をちゃんと英語にして偽の真名に入れてるし。
「はーい、すごいすごい、よくできました」
ついでに頭をなでてやったら、えへへ、と顔をほころばしていた。
というか自然な流れで頭を撫でてしまったし、意外と心地よかった。
癖になっちゃいそう・・・・。
普通にしていれば可愛いのにもったいない逸脱した逸材であった。
こうして俺の教室には吸血鬼（偽）が存在した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：０「吸血鬼との残念な出会い」（後書き）

２０１１／１１／１４（月）結構手直ししてみました。
誤字の一部修正、改行により少しだけ見やすくしてみました。
随時編集した際は後書で報告するのでよろしくお願いします。
初投稿で稚拙なところもあると思いますが寛容にお願いしますね♪
誤字脱字に関しては連絡してくださると助かります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１「吸血鬼の発足した部活」（前書き）

クラスで浮いている「斎垣鶸」
それに絡まれて徐々に同じポジションに浮遊していこうとする俺「高村悠」
そんな二人の、二人にとっては些細な珍しい出来事が今日も綴られる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１「吸血鬼の発足した部活」

吸血鬼（いや、人間だけども）と接点を持つようになった俺はしきりに鶸（旧：中電さん）に絡まれるようになった。入部しないか云々の勧誘から移動教室までちょこちょことついてくる。背も小さく歩幅も狭いから俺に懸命についてくるような感じの必死さがいつも可愛らしかった。

他の女子が嫉妬するのも納得の可愛さである。

ちょっとこれは正直ずるい。

「なぁなぁ！悠、悠！飯食おうぜ！」

昼放課も例外ではなく絡まれる。

「下の名前で呼び合うように！」とこの前強制された。

言動動機は中世の電波なので受信不可。

相手が美少女でそれを俺一人である意味独占しているのだからこれもある意味ではリア充なのかも知れないが、周りの視線と囁きが辛くてとてもじゃないがそんな気持ちにはなれない。

「あいつら、くっついたのかな？」「高村って案外そういうキャラだったんじゃね？」「絡まなくてよかったぁ～」

こういうことがなければ俺は鶸に一目惚れなんだろうけどなぁ～。

なんせ中世電波吸血鬼だし。

根も葉もないようなことばかり囁かれる。

勝手に俺を電波キャラにしないでくれ・・・・。

これでは、このままでは羽瀬○小鷹君みたいになってしまうではないか・・・・！

それは阻止せねば！

それでも可愛い女の子が爛々とした目でこちらを見ているのにも拘らず断るなんて野暮をするほどの男ではないようで。

「仮にも女の子なんだから、もうちょっと上品に言葉使えよ」

可愛らしい水玉模様の布に包まれた弁当を持って前の席の奴の椅子を勝手に使い俺の席に弁当を広げる。
「くくく、俗世とは縁のない妾(めかけ)にはどうでも良いことじゃ。はぅ～今日も飯が美味そうなのだ！」
彼女の弁当は2割惣菜、残りは見るからに手作りといった感じの結構本格的に気合の入った弁当である。
それに対して俺は学校の側で買ったコンビニ弁当である。
「お前の弁当はいつも豪華だなぁ～。それほとんど手作りだろ？」
「ふふふ、何せ妾が魔力を込めて作ったものだからな、美味に決まっているのだ」
得意げに弁当を見せびらかし箸を進める。
「まぁ、確かに自分で作ったら大抵美味く感じるよなぁ」
あまり深く考えず発言したが、彼女には引っかかったようであった。
「む、悠よ。貴様はわた、むぅ・・・妾の手料理が不味いとでもいうのか？」
「主語間違えるくらいなら変えなくてもいいのに・・・・。いや別にそういうわけでは・・・」
頬をぷくっと膨らませてる鶸が異常に可愛くて目をあわせ難かった。
「ふ、いいだろう。ならばこの夜の宴(うたげ)にはもってこいの吸血鬼の吸血鬼による吸血鬼のための供物を少しながら分けてやろう・・・・」
何で吸血鬼のくせにリンカーンをリスペクトしてるのかは定かではないのだ。
俺の発言を挑発だと勘違いした彼女は弁当をこちらに差し出してきた。
「いいよ、お前腹減ってるんだろ？俺が食ったら減っちゃうじゃん」
鶸は少し顔を赤らめて何故だかもじもじしながら怒鳴った。
「べ、べちゅに、お前のために手料理しようとか初めての友達に振舞おうとか思ってないんだからなっ！！・・・・・か、噛んじゃった・・・・はぅ」
周りがざわつく。俺は驚く。

「おい、あれが噂のツンデレじゃね？」「あぁ、きっとそうにちげぇねぇだ」「おらもいわれてぇだ」「僕も言われたいぉ」「手作り弁当とかまじチート」
「ずるいよね、可愛いだけでなくあんなことも平然としちゃって」
「まじ神憎いー」
羨望、渇望する声、嫉妬の声など様々である。
・・・一部の人間いつの時代のやつだよ。
周りの視線を集めてしまったことに気が付いたのか急にしおらしくなり、早く食べろといわんばかりに弁当箱を揺らす。
「じゃ、じゃあ、遠慮なく・・・・」
恐る恐る吸血鬼でツンデレな彼女のお手製の弁当に手を出す。（誰にデレている・・・！）
「ん、美味い・・・！」
鯖の煮付けのような純和風な西洋の伝承に出てくる生物とは無縁のものを試食したが正直かなり美味しかった。
「ふふ、ふふふ～、そうだろう、そうだろう。妾の辣腕（らつわん）に脱帽するといい」
未だに頬を赤らめているが虚を張って取り繕っているところも可愛かった。
ほんと、普通にしていれば絶対人気者になれただろうに・・・・。
「いや、冗談抜きでこれは普通に美味いよ。吸血鬼もどきのくせにやるな」
「くくく、これで妾の凄さを身をもってわかっただろう。何ならもっと食っても良いぞ？」
「いや、これ以上食ったら箸止まらなくなりそうだしいよ」
残念だが胃袋と相談して結論を出し俺は断った。
すると露骨に悲しそうにしゅんとしてこちらを伺う。
「・・・・・食べてくれないの？」
どうやら上目遣いの目線の破壊力は強力なようで俺は事もなく討伐された。

「・・・いただきます。・・・じゃあ、お前はこの俺の弁当も食っていいぞ、コンビニのだけど」
「・・・うん！そうだな！わけわけしたらきっともっと美味しいな！」
満面の笑みで二つの弁当箱を中心に寄せて俺に箸を促すようにする。
「早く食べるのだ！放課が終わってしまうぞ！」
「そうだな、じゃあ改めて食べるとしようか」
「うん！」
吸血鬼はとても朗らかな声を上げ昼食を楽しんだ。

放課後。
みんながぞろぞろと部活へ向かおうとする中俺はぽつんと一人ボーっとしていた。
この学校は部活にも尽力しているというか物凄い出費をしているようでトレーニングジムまである。
ダンベルだけで１０種類くらいだしバーベルも２００ｋｇまで変化できる奴が３つも完備されているらしい。
将来ボディービルダーが大量発生しそうである。
そこまで設備が整っているせいか、はたまたそれを求めて猛者がやってくるのかこの学校の部活動の成績はどんな部活でも県大会優勝以上の結果を残している。
どこの例外もなくだ。
そのせいで校長室前の廊下は物凄い数の賞状やら旗やらが飾られている。
そのせいで部活動の意識レベルが上昇し、未経験者は勿論、経験していても実績のない生徒は入部もできない。
「はぁ、・・・だからだよなぁ・・・みんなこの学校選ばなかったのか・・・・」

そう、設備も充実いていて授業料も安いという一見最高な学校に見えたがそういう裏があったのだ。
一介の高校生では入部さえできないのだから。
どうりでみんな「俺はいいよ・・・」「頑張れ・・・・」などと拒否と憐れみをくれたわけだ。
そのせいで俺の学校からでは唯一俺だけがこの学校を第一志望にしていたらしい。
浅はかだよなぁと嘆息。
「何が何だってそんなくらい顔してんだ？」
突然目の前に褐色の物体が視界を遮る。
「うお！・・・・って、えーっと、誰だっけ？」
「えー、ひどいよ磯野君。僕だよ、僕」
「ん？あぁ、中島か？悪いな、どうやら俺もど忘れみたいだ」
「何だ、以外と普通に喋れるんじゃん。てっきりもっと痛い奴かと思ったぜ」
あの中島君とはかけ離れた随分なイケメンで髪の毛もしっかりろロン毛に入る部類だ。
リア充の臭いがする。
「はぁ、先入観だけで判断されても困るよなぁー」
ハハハ、と快活な笑いをしながら俺の悩みを一笑する。
「しゃあねぇよ。だって自己紹介聞いたろ？俺、未だに脳裏に残ってるぜ」
「まぁ、たしかに」
鶸は俺に吸血鬼としての真名(まな)を教えてくれたときと全く同じ台詞を公衆の面前で発したのだ。
そりゃ、唖然悄然(しょうぜん)ビックリンコだわな。
「そんな奴と普通に喋ってるんだからお前だって異端視されても仕様がないんじゃないか？」
痛いところを突かれたが最近の鶸は痛い発言を除けば結構普通の子なので変な奴扱いされるとこちらの内心が翳(かげ)る。

「・・・・・はぁ」
「まぁ、そんな落ち込むなって。人生山あり谷ありだ」
「くくく、この学校に入ってからは谷まみれだ・・・・」
「その含み笑いは彼女のまねかい？」
「真似てないし、中島のくせに生意気だぞ」
こんな他愛のない話を同姓としたのは久々でちょっと元気になる。
「わぉ、こわいこわい。ジャイアソが混じってるよ。」
俺の正面の机に腰を預けていた中島が立ち上がり、飄々（ひょうひょう）と廊下に向かう。
「そろそろ帰るな。そこの吸血鬼に殺されそうだし、廊下で彼女待ってるから」
背を向け手を振る中島に向かって俺のもとにものすごい剣幕で駆け寄ってきたちびっ子吸血鬼と共に叫ぶ。
「中島ー」
「あー？」
「「リア充は死ね！！！！」」
「・・・はははは、これは手厳しい」
俺らの声を気にも留めず姿を消していった。花沢さんとでもくっついたのかな？

「無事か、我が眷属よ？！」
俺が外傷を負ったのを確認するためにか腕やら腹辺りをぺたぺたと触ってくる。
「突拍子もないな、お前。それに俺は吸血鬼の眷属になった覚えはないぞ」
衝撃の事実を突きつけられたかのように目を見開いて、鶸は言った。
「あの激しい夜を忘れたとでも言うのか・・・・」
「何が激しかったんだよ？！」
他人に聞かれたら勘違いされる確立１２０％だ。

２０％の余剰はなんなのかはしらん。
「あの明月の紅（くれない）の契りを忘れてしまうとは・・・・・これも下等なる人間の仕業か！」
これ以上吸血鬼ネタに付き合う暇はあるけど面倒だったので俺は軽く彼女にチョップする。
「いちゃい！あぅあぅ～したかんだぁ～。なにしゅるのしゃ？！」
「すげぇ可愛らしい喋り方になってるのは置いておいて、何で鶸はまだここにいるんだ？」
唇をさすりながらこちらを睨んでくる。
「お、お前に用があったのに中島とか言う奴と喋りだしたから割り込めなくなったのだ！」
いつもの態度とはまるで違った普通の子の感性がこんなどうでもいいところで発揮される。
「何でそんなところだけ一般人なんだよ、鶸さん・・・・・」
「だ、だって、恥ずかしいのだ。そんな、どうどうと人と話すなんて・・・・・」
俯きながら指を恥ずかしさを隠すためにか弄ぶ。
「俺には随分態度が大きいような気がするけどな・・・・」
「ふ、ふん。貴様は我が眷属だぞ？例外に決まっておろう」
「・・・・さいですか」
もういろいろと諦めて俺が折れることにした。
「そこでだ、我が眷属よ。この紙切れに署名してくれ」
差し出された紙はよく見ると部活動申込書だった。
「あー、あれだ。神話研究部だっけ？俺が入るのか？」
胸を張って俺以外にはできないとか言う尊大な態度で言葉を紡ぐ。
因みに胸はぺったんこのようだ。おっと、これは禁忌かな。
「我が崇高なるイデアを誰も理解できぬようでな。勧誘に勧誘を重ねたが結果は零であった。そこで我が眷属が部員となれば定員数を満たし部活として認められるようになる」
「まぁ、お前についてきそうな人間はいないだろうな・・・」

ここで断っても無駄なことをなぜか予期できてしまい心の中で嘆きつつも彼女の意に沿った答えを表明する。

「・・・・わかったよ」

「ほんとに？・・・・やったーーーー！！」

心底嬉しそうな顔をしている彼女を見たらそこまで悪い気もしなくはなかった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：１「吸血鬼の発足した部活」（後書き）

２０１１／１１／１４（月）修正。改行ｅｔｃ・・・
度々修正しまくりますので
ご容赦願いますが少しずつ
良作へと昇華していこうと思います！
（昇華したら少しずつではなくなるけれどｗｗ）
あとそろそろ新キャラ出します！
閑話休題。
小っちゃくて吸血鬼って最高だよね。
ただの趣味でメインヒロイン作っちゃったけどそこは堪忍な（笑）

ダンス・イン・ザ・ヴァンパイア・バンド
っていうアニメのミナ姫がかわいいから一度見ておくべし！
全く関係ないこと書いたけど反省はしてないのだぜ！
むしろ満足。
では次回も見てくれると個人的にデスクトップの前で万歳してしまいます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２「混沌（カオス）な神話研究部」（前書き）

顧問の教師を残念なベクトルへ持っていきすぎてしまい後悔の念が・・・。
でも、こんな人がいても良いと思っている俺がいるというか
現実の教師が面白くなさ過ぎてちょっと残念。

そして副担任（俺の現実高校教師ね）がホモ疑惑・・・・。
まじかよっ！！（汗

本編に関係のないことも書いてしまいましたが、
とにかくかぁいい女の子との
戯れをどうかこの文を用いて想像してくださいな（笑）

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２「混沌（カオス）な神話研究部」

入部手続きをするために職員室のすぐ隣に設けられた「申請室」というところに足を運ぶ。この申請室というところは所謂事務室のようなものらしく、雑用担当らしい。部活の申請もここで簡単にできるらしく鶸も即刻新設許可を得たそうで、部員が規定にも満ちていないにも拘らず部室まで宛がわれている。

「ほんとにこんな部活成立するのか？」

俺が訝しげに尋ねる。

「くくく。・・・・・・わかんない」

意味のない含み笑いだった。

ものの数分で申請を終え休憩しようと進言してきた鶸に乗ってできたてほやほやのくせに妙に設備が整った部室に向かった。

「何でこんなに部室に物置いてあるんだ？まだ部活始まってすらないのに？」

「顧問という肩書きをもった我が僕（しもべ）の尽力によるものだ。妾の配下は優秀なのだ」

当然のように顧問であろう教師を小ばかにする鶸だった。

木製でドアノブが金属の学校には似つかわしくないような西洋風の扉を開けて中を覗けばこれまた不釣合いな感じの地球儀だの歴史書だのまるで大航海時代の人間のための部屋が視界に映る。

ちょっとした異空間にいる気分だ。

「人類の歩んだ歴史の中で唯一の偉業は文字だ。文明文化は根幹にすべて文字が確固たる存在があるからこそ成立する。音楽にせよ絵画にせよそれを記号の集合体として捉えればそれはすべても字と化す。愚鈍なる人間の唯一の偉業だ」

人によっては壮麗、絢爛と感じるであろう空間でゆったりとした歩

調で語りだす吸血鬼の言葉に俺は飲まれていった。無言で彼女の言葉に耳を傾け静寂が訪れる。
「改めて言おう、我が神話研究部にようこそ！」
くるっと振り返り、慈愛に満ちた悪の権化の象徴たる吸血鬼にはふさわしくない朗らかさで俺を歓迎してくれた。

用意周到に給湯器と紅茶パックがあったのでそれを口に含みこれまた豪華な猫脚のソファーに腰を落ち着かせくつろいでいた。

・・・・・・。
部室の一角に明らかに異次元のようなオーラを醸し出す場所があった。
部室の中に更に小部屋に繋がるような設計であろう場所なのだろうが・・・・・・。
何故喘ぎ声が聞こえてくる・・・・？
背中に汗が滲み出るのを感じながらも恐る恐る鶸の方へ振り返る。
「・・・・ん？・・・っは！あれは妾とは関係ないぞ、一切合切無関係じゃ！！」
読んでいた分厚い歴史書を投げ捨てん勢いで振りながら否定するが、ここには俺と吸血鬼もどきしか見受けられない。怪訝そうに彼女に言及する。
「・・・・だってここお前の部室だろ？実は結構サキュバス思考があるのか？」
神話研究部らしくその方面のネタで攻めてみた。
「妾をそのような下賤なる下等種と一緒くたにするでない！・・・・ふん、そんなに疑うならば己(おの)が目で確認してくるが良い・・・・」
あの怪しげな扉からそっと目を逸らしながら力なく言った吸血鬼の姿を見て余計に一抹の不安を感じたがそれを払拭するためにもチキ

ン心を揺さぶって立ち向かう。部室の入り口と同じつくりの扉に手をかけ一気に引く。

その室内は異様な光景に包まれていた。
部屋の奥にテレビが鎮座しながら１８禁なあれの映像が爆音で流れている。
そして所狭しとその類のＤＶＤケースやら雑誌が詰まれている。つーか変な匂いする！！
「ぶえぇっ！！・・・ごほっごほっ、くっさ！なんだこれ？！」
よろけたじろぎながら後退し、異空間から距離をとる。
「あぁ～～？人の三大欲求の一つを満たしているときにちゃちゃ入れないでよねぇ～」
俺に対して一切動揺せずというか歯牙にもかけない感じで液晶をガン味している女性がいた。
因(ちな)みにその女性は恍惚な表情で頬を上気させながら
「はぁはぁ、ここ、マジ・エ・ロ・ス・ギ・ル！！」
などと戯言（口にはしっかり出してしまっている）を吐いていた。
初対面ながらかなり俺は引いていた。
硬直してしまった俺を見かねたのか呆れ顔で鶸が近付いてくる。
「あまりそやつに近寄るな、毒されるぞ」
俺の袖をくいくいと引いて安全地帯へと誘導してくれた。
「な、なんなんだ、あれは？！」
息と声を荒げながら俺は詰問する。
「いや、何だと言われても・・・そのだな・・・・。あやつは、・・・・そう、顧問というやつだ」

顧問が残念すぎる件について。
これはひどい。
呆れて乾いた笑が止まらないよ。
「何で教師が学校内でＡＶ見てんだよ？！」

思っていたことがそのまま口を経由して外に発散されていった。
「あー、まぁ、気にするな」
本日2回目の慈愛に満ちた優しい顔で俺の肩に手を置いてくる吸血鬼。
いやいやそんなリアル色魔みたいな奴に顧問務まらねぇって。
きっと、本物のサキュバスもドン引きだろう。
「ねー、あんたさぁ、さっきから私のことかなり悪く言ってるよね？」
急に耳元に生暖かい空気が近付き悪寒が生じる。
「うがっ！・・・・うぉ、動けない・・・！」
見ると後ろから両手でしっかりホールドされていた。
「ねぇ・・・・？」
色艶が溢れんばかりというか溢れているからこそこんなところであんなもの観ているのだろうけれど、兎に角えっちぃ声が俺のすぐ側からする。
「な、なんでしょう・・・？」
いやな予感しかしない。
「いやー、ねぇ。ほらぁ、教師のこと小ばかにするような子にはお仕置きが必要なんじゃないかなぁって思って」
粘着質のある意味深な発言をする自称教師の色魔が俺の後ろにいる。
「具体的にはどんなことを・・・・？」
恐怖心を増長させたくないがために増長させるような問いをする愚かしい俺がここにいる。
「性、教育！」
こいつ、最初の感じ一文字強調しやがった！
救援要請を求め情けないながらにも震える子羊のような感じになってしまっている俺は藁にもすがる気持ちで吸血鬼を見る。
「すまぬ、眷族よ。これは我が部の通過儀式だと思ってくれ・・・。妾も既にその最大の障壁は乗り越えたのだ・・・」
何かを達観、もしくは諦念してしまっている吸血鬼の顔はとても俺

にとっては非情なものだった。
くそ、こんなときだけ冷酷になりやがって！！
「やだ！そんなんなら俺この部活辞めてやる！！」
俺の心の叫びで糾弾したが叶わず。
「ふふふ、女教師の本気を舐めちゃいけませんのよ・・・」
そう言いながらヘビが体を這うかのようにねっとりと動く彼女の腕が俺の首に回り柔道とかにありそうな絞め技を喰らった。
「もふっ・・・！ふごっ・・・」
後半はただ空気の抜けるような音しかしていないと思う。
あんまり思い出せない。
「達者でな、我が眷属よ・・・」
吸血鬼もどきの声だけが嫉ましくも脳裏に染み付いていた。

とぅっとぅるぅ～～。何かが吹っ切れたぜ☆
恐らく俺の初めてを奪われていることだと思う。
何か顔面と上半身が誰かの唾液のようなものでべたべたで少し変な匂いがした。
うぅ、きもちわりぃ。
開眼するとやはり再びソファーの上で眠っていた。
「お目覚めはいかがですかね、高村悠君」
落ち着いた温もりのある声がしてそれに助長され、俺の意識がぬうっと浮上する。
「えー、あー、結構悪いですけど、あなたは先生か何かですか？」
如何せんこの部室に来てからの幾ばくかの記憶が生存していないため彼女が誰なのかわからない。
「ひ、ひどいわ、悠君！あんなに激しいことがあったのに私という女のことを忘れたのっ？！」
えぇ～、俺いつの間にかそんな行為に及ぶほどにリア充になってた

のか～。
彼女の超絶爆弾発言に脳が追いつかず、曖昧な思考回路が逡巡する。
「そしてあなたはあの胸のないちっちゃい子に興味を持つようになったのね！うぅ、私どうすればいいのよ？！胸はEカップだからこれ以上ちっちゃくなんないの！！」
サイズがどうだと大きさが変化するということはないだろう、と細部の表現に内心突っ込みながら、彼女を吟味する。
目はくりっとしていて、鼻は少しだけ低め。
髪の毛は鶸より少し短めでそれでも十分ロングストレートだ。
ほんのり化粧してあることには触れない方針で。
ボディラインはなんとまぁ、たわわに果実が二つ実ってございます。
「おいこら、そこの雌豚。高貴なる妾を罵倒するとはなかなかいい度胸ではないか。つーか、死ね！ちっちゃくないもん！」
ぴーぴーとまるで子供がいるかのように叫びだす鶸に一瞥もくれず、そのちょっと大人びたとち狂った発言をする彼女が俺を見据える。
「私よ、わたし。神話研究部とかいう中二病末期患者が作り上げたみたいなところの部長があまりに憐憫で不憫で可哀想で可愛かったから顧問になってあげた優しいお姉さん系美少女、江藤実智（えとうみち）よ！」
言いながら俺に激しく抱きついてくる実智さん。
あー、つまり要約すると彼女は先生で俺たちの顧問なわけだ。
自分でお姉さん系美少女とか言うべきではないと思う。
何で俺ハグされてんだよ。
教師と激しいことって俺どんな性癖だよ。辟易するわ。

そこで俺は大事なことを思い出した。
くっついてきた彼女はとても綺麗でまさに美女キャラ認定確定なのだが、俺は大事なことを思い出したので引っぺがした。
大事なことなので大事なことということを二度書いた。
「お前、俺に何しやがった？！つーか俺べとべとするの絶対お前のせいだろ！！」

俺に弾き飛ばされ床に魅力的な姿勢で座り込んでいるこの女が俺を見つめながら体をくねらせる。
「あぁ！そんな強くされたら壊れちゃう・・！でも、いいの。あなたで私を満たしてあなたがしたいように私を壊して酒池肉林の限りを尽くして！！！」
両手を斜め上に掲げながら人間としてどうかと思う発言をしている。
「どんだけ敏感なんだお前？！教師にお前とか言っちゃてる事に本来なら沈痛な面持ちになるべきはずなのに今回の相手には全くそんな気持ちが起こらないぜ！なぁ、鶸！何でこんな変体がここにいるんだよ。お前ここユートピアとか言ってたけど、ディストピアの間違いじゃねぇか！」
不平不満と嘆きと救済を求め鶸を見る。
こんなときこそお前の中世電波を使って外にこいつを追い出してやれよ。
しかし、彼女が沈痛な面持ちになり、「わ、わたしがその犯罪者を止めようとしてお前の前に立ち開(はだか)ったら、追剥にあって、全身に・・・・あぅ」
目の回りを紅くし頬を赤くしなんか俺以上に満身創痍な彼女であった。
そしてお前は何をされた？！
「ふふふ、お嬢ちゃん。それはまさに『追剥が原へ蛍狩』だよ。追剥するのは私だけれど」
愉快犯（性的）と恐らく同じような行為をして悦楽の境地に立っている彼女が上手くない事をいって、「あぁ、私なんてハイセンス！」などとここでも戯言（音波として発信されている）が流れていた。
因みに追剥が原へ蛍狩というのは自ら危険な所に行くことの喩えだ。
このやろう、自分を危険だと公言していやがる。
「ねぇねぇ、悠君。一緒にＡＶ観ない？」
ほんと、腐れ外道な発言を初対面の生徒に対してしているこの人に呆れ、これ以上付き合っていると俺のほうが持たないというか鶸は

もう結構精根尽きた感じで見事灰色になって唖然茫然としているのでこの流れを断ち切らないといけない。連続して同人誌がいい？それとも一緒にエロゲする？あ、やっぱ実践はかぁ～、流石悠君わかってるぅ！などと意味不明に俺の体をぺたぺた触れながらほざく彼女に対しずっと虚ろジト目で焦点を合わせない様にしてぐっと何かを堪えて俺はこの環境に対応するように努めた。（体が素直なのに初めて憤りを感じる）そしてようやく口が動きそうなほどに脳がぐるるぐちゃりと融解され、ゆっくりと空気が漏れてため息が出る。

「ん？」

何かを期待するかのような視線を送り出してくる彼女に対してここまできて俺はどうやら侮蔑という感情が沸いてきたらしく、内心すごく見下したかのような顔なりにながらゆっくりと口にする。

落ち着いた大人で冷静沈着な対応。

「江藤先生。俺今日入部したばっかりの高村悠って言います。これから2年くらいよろしくお願いしますね」

不細工ながらも見下しながら大人の余裕というものを醸し出すために首を斜め３０度に傾けてにっこりと微笑む。

恐らく少女漫画風に表現されると背後には薔薇の花が満開のシーンだ。

「・・・。がーん。みっちーのマジトーク全無視されたーー！！・・・うぅ、泣きたい」

泣きたいのはこっちだよ。というか、鶸が少し嗚咽を漏らしている。

何かすごく頭撫でながら慰めたい気持ちが起こったけどこっちに隠しボス並みのステータスの化け物（モンスター）がいるのでそっちの対処にまずは専念。

「えぇと、とりあえず警察呼びますね」

尻ポケットから携帯を取り出し、例の３つの数字で構成された部署に電波を送信する。

・・・仕草を見せた。
「ごめんなさい！冗談が過ぎました！！」
そこで全力で土下座をする彼女がそこにはいた。
とりあえず、見境はあるようなので少し安堵した。
「はぁはぁ、土下座プレイもいいかも・・・むふぅあふぅ」
前言撤回。全力で。

そんなこんなで入部直後から戦慄するかのような出来事の起こった将来が不安な神話研究部なのであった。

後日談。
といっても今回の顛末の直後の話。
「じゃあ、私ムラムラがひいたので職員室戻るねー、じゃあねひーちゃん、ゆーたん」
手をひらひら振りながら軽い足取りで戻っていく変態教師。
ここにも普通にしていれば綺麗なのに勿体無い逸脱した逸材がいた。
だけど今回の輩は鶸以上にたちが悪いので個人的にお引取り願いたい。
ひーちゃんは鶸のことでゆーたんは俺のことだと思う。いま初めて聞いたからしらん。
「もぉ、帰ってこなくていいのだ・・・」
心底嫌そうな顔をしながらソファーの上に膝を抱えてちっこくなる鶸。
相変わらず挙止動作が似合っている。
「この学校の教師はすごいなぁ」
呆れ半分ある意味すごいと思ったので口にした。
凄いといっても凄々の方の意味で扱っている。
「お前は初対面の人間に対する感想はそれしかないのか・・・・」
そういえばこいつの一喝に賞賛したなぁなどと思い出す。
「あ、お前ってやっぱり人間？」

揚げ足を取って軽くからかってみた。
「ち、違うのだ！わた、・・もぅ！私は立派な吸血鬼なの！！」
あー、キャラ設定一部放棄しやがったこいつ。
そんな駄弁りを小一時間一緒にソファーに座りながら夕日の茜色を満喫してから俺たちは部室をあとにした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：２「混沌（カオス）な神話研究部」（後書き）

２０１１／１１／１４（月）修正。改行、変更、ｅｔｃ・・・。
最近この執筆のせいで
一日のうちの大事な２時間がぐいぐい削られていきます。
正直目が痛いです・・・。
一種の中毒ですね。
この時代は娯楽文化が多すぎて物理的に時間が足りません。
あー、一日５０時間になーれ♪

これからも期待してくれる人がいると
個人的にはデスクトップの前で万歳してしまいます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３「妹、推参！（入部フラグ）」（前書き）

妹がいないせいかどうしても妹萌に反応してしまう・・・。
でも、小さい子に小さい子なりの可愛さがある！！
そんな風に思われる愛されキャラを作りたいです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３「妹、推参！（入部フラグ）」

顧問が残念すぎることが発覚し、俺のコルトパイソンも萎(しぼ)んでいる。
（うはっ、伝染してる！！）

早朝から昨日の衝撃事件というか大惨事を想起したせいで若干後頭部が鈍化する。
「うはぁ～、頭痛い～」
片手で側頭部を軽く押さえて、少し伸びをしてリフレッシュを図る。
そのとき豪快な音と共に扉が開く。
「グッドモルニングなのだ！にいちゃん！」
我が妹こと悠葵(ゆき)が爽快すぎる挨拶と直後、反射してきた扉に鼻頭をぶつけるという元気ぶりを披露してきた。
「うぐぅ～、ふぬぅ～、あぐぁ～、痛いぃ～」
何とも悲痛そうな呻き声を上げながら扉付近で彷徨っている。
まるでゾンビの踊りみたいだ。（ドラゴニッククエストの技っぽくない？）
「朝から元気だな、悠葵。もうちょっと大人しくしてくれないと俺の頭痛が治まらないぞ・・・・」
この元気印娘とはかれこれ１２年ほどの付き合いではあるが俺のテンションとは対照的で常に元気なのだ。
「にいちゃんよ！そんなろぉテンションだと今日一日思いやられるぜ！ちょっと元気を分けてあげよう！」
さっきまでの痛みがもうどこかに去ったのかすっかり元通りになった悠葵が俺のほうに駆け寄ってくる。
「あぁ、もう是非とも如何ともし難いほどに分けてやってくれ・・・」
ベットの前で仁王立ちする妹が頬を綻ばせ、口を少し歪ませた。
「必殺！ゆっきーアタァーーック！」

単純に俺に飛び掛る姿勢でくっついてきた。
小さくて軽くておまけに柔らかいから何となくぬいぐるみと戯れているような錯覚に陥る。
「ふごっ？！いきなり首絞めるな！」
見事に妹の細い腕が俺の気道を塞ごうとしていた。
そこで俺に馬乗りした状態でくくく、と含み笑いをしている妹がいる。
「これでにいちゃんもお目目ぱっちりなのだ」
「あぁ、目は覚めたから俺の上でゆっさゆっさ揺れないでくれ」
「えーっと、これって確かきじょーいっていうのだよ、ね？たしか？男の人がされると気持ちいみたいな事をこの前友達が行ってたよ？」
朧げなのか未だに前後しながら顎に手を当て考え込んでいる。
昨日の今日だからいくら妹でも妙にこっ恥ずかしい。
誰だよ、中学一年の分際で些か以上におませだぞ。
「うぅ、なんかくすぐったい・・・」
頬を赤らめるな。
恥ずかしいならとっととどきなさい。
「少なくとも兄妹でやるもんじゃないからどきなさい」
「・・・悠。あんた妹に遂に欲情しちゃったの・・・・・。まぁ、悠葵は可愛いから仕方ないかもしれないけれど。・・・軽蔑するわ」
まさに絶妙で俺だけには極悪のタイミングで母親がこの光景を目に焼き付けてしまっている。
母親がこの一瞬のシーンだけで偏向の塊の判断を下し、俺は軽蔑されてしまった。

その後、優しい妹が何もなかったかのように「にいちゃんをおこしただけだよ？」
と母が憤慨していたところで開口したらしく、あっさり母の誤解という結果で終わった。

まぁ、こんなのが事実として認可されてしまったら俺も人生涙目だ。

高村悠葵（たかむらゆき）。俺の妹にして中学一年生である。

俺に似ても似つかぬとても可愛らしい容姿を有しておりとても妬ましい。

というか家族で俺だけ不細工だ。

両親は年齢を考慮しなくてもいいくらいに結構な美男美女である。

先日、母と買い物をしていたらカップルに勘違いされたほどだ。（因みにこれはスーパーの店員の目が狂っているとしか思えないが）

鶸のような上品な感じの麗人とは真逆で、人に愛着をわかせる様な人懐っこい子犬のような感じである。

その容姿にマッチしすぎた性格で誰彼なく無差別に元気っぷりを振舞っているためとても人気者である。

ただそれでも、やっぱり女子の世界は男子と違うようで。

小学生のくせに学年が上がるたびに告白などをされる回数がぐいぐい増えていき、俺としては羨ましい限りなのだが、一部の女子からは羨望を含んだ裏腹な反感を勝ったらしく、理不尽に嫌がらせをされたらしい。

学校では気丈な振る舞いをキープさせていたからか家に帰ると俺の前で物凄い勢いで泣き出していた。

そのときの相談役に抜擢（妹御指名）された俺は悠葵を慰めつつも稚拙なカウンセラーを開講してそれがなんとか功を為して今は丸く収まっている。

全く以て最近の小学生はおませすぎる・・・。

その頃は高校受験もあって忙しく俺は疲労困憊（ひろうこんぱい）であった。

それ以降、悠葵は以前よりも俺を慕ってくれるようになり結構家族間の交流も円滑に進んでいる。

以前から悪くはなかったが。

「じゃあ、行くぞ悠葵」
「ちょっと待ってー！教材一個入れ忘れちゃったー」
とててて、と階段を上る音がする。時計を確認して安堵。
峻嶺学園まではそこまで遠くなく自転車で２０分ほどである。
只今ＡＭ８：００。
チャイムは後４０分後にあるのでかなり猶予はある。
「おたまー」
階段を下りてその勢いを利用して俺の腕にくっついてくる妹の頭を雑になでてやりながら母親に目をやる。
「いってらっしゃい、シ・ス・コ・ン」
「・・・あなたの勘違いでしょーが」
「み、認めたら負けな気がするもん！」
言動があと２０歳若くないと需要も受容されないのは放置しておこう。
「・・・はいはい、もういいよ、シスコンで。・・・いってきます」
背後で笑顔で手を振っている母を一瞥して、未だにくっついている妹を歩きづらいので引っぺがす。
「あぅ、なにすんのさ、にいちゃん！」
「歩きづらいだろ・・・」
「にいちゃんが元気ないから、シスコンパワーを分けてやってるのに！」
「・・・意味わかってないだろ。あと、階段から降りてきたときの挨拶原形とどめてないじゃん」
「いまさらだね」
「いまさらだよ」
他愛のないことを妹と話しながら、自転車を引っ張り出してかごにバックを納めゆっくりと、加速度的に目的地へ発進する兄妹だった。
ＡＭ８：２８校門をくぐる。

それまでにも妹と昨日何があったなどいろいろ話ていたが俺が鶸の話を出すとちょっとむすっとした顔をした悠葵が少し謎だった。

峻嶺学園は俺たち一家の都合を見計らったかのように計略的に今年度から中等部と合併をし、妹と通う場所が合致しているのである。教室棟と駐輪場は中高で異なるので校門を出たあとは別れる事になる。

「ふふふ、にいちゃん。私という温もりが恋しくなっても学校で泣いちゃ駄目だよ」

自転車に跨ったまま校門で静止して、他の生徒に迷惑をびしびしかけながら俺を見つめる。

実に朝から元気で口が減らないやつだなぁ、と感心する。

「・・・もう相談に乗らないからそこんとこよろしく」

加速を失った自転車を漕ぐのも面倒になり、手で押して行こうとしたら悠葵が全速力でこの短距離を自転車で激しくこちらに突っ込んできた。

「ごめんなさい！冗談です！日本人流のアメリカンジョークです！」

凄い泣きそうな顔で懇願してきた。

「うそうそ、冗談だから。じゃあな」

俺の台詞に安堵して、一笑しながらバイバイと元気に手を振っていく妹を見送ってからゆっくり教室へ向かうことにした。

日本人流のアメリカンジョークとはどういうことなのだろうかとなど心の中で思ったが、どうせ本人ですら回答できそうにないことだと判断を下しそのまま心内洪水（しんないこうずい）に流した。

昼放課。

特に一限から4限まで特筆するようなこともなく、鶸が騒ぎたまに中島と会話する程度だった。

一つの机に犇（ひし）めき合っている二つの格差が生じている弁当を並べな

がら鶸と一緒に箸でつつきあっている。
「ふむ、コンビニ弁当の製作者もなかなかやるな。妾の舌を唸らせるとは・・・」
コンビニ弁当など食べたことがないといっていた鶸に食わせてみたところ意外と素直な賞賛が返って来た。
コンビニ弁当食ったことない家庭ってどれだけ裕福なのだろうかなどと不思議に思いながらも会話を弾ませる。
「だろ？意外といけるんだよ、これが。添加物とかも減ってきてるし」
「だが、添加物などという下界の物に手を染めているようでは妾の作ったものには勝つことはできんな！」
ふふん、と鼻を鳴らせ上機嫌に自分の作った料理を口に運ぶ鶸を眺めながら俺も同じものを口に入れる。
「うん、鶸の手料理にはコンビニでは太刀打ちできないな」
「・・・っんぐ！」
すると急に顔を真っ赤にさせながら、咽(む)せて苦しそうに鶸が机にうな垂れる。
「おいおい、ゆっくり食えよ。吸血鬼のくせに普通の人間みたいな可愛い事故起こすなよ」
席を立ち上がり、彼女の背中をさする。
最近彼女の言動が教室では結構大人しくなり男子の視線は羨望が多くなった気がする。
「こふっこほっこっほこほ・・・。むふぅ～。いきなり何を言うのだ？！」
今度は急に怒り心頭に俺に不平を言う。
「いや、褒めただけじゃね？」
「・・・急にそんな褒められると恥ずかしいのだ・・・」
よく聞き取れなかったがまた顔を赤らめてしまったので何かまだ引っかかってるのかとも思ったがそれどころではなくなってしまった。
「あれ、きみ中等部の子だよね？どうしたの？」

名前を知らないクラスの女子が尋ねているのが振り向くと視界に入る。
「あれ、悠葵・・・？」
なぜか悠葵が弁当を持参してこちらを凄い剣幕で睨みながら突っ立ていた。
不思議に思い近付いていく。
「おい、どうしたんだ悠葵？用事でもあるのか？」
俺が近付くにつれて俯き始めプルプル震えだした。
「ん？悠葵？」
「に、にぃ・・」
「？」
首をかしげる。
「どうした、悠葵？」
家族のことと察した尋ねていた女子が退いて妹がかっとこちらを睨む。
「にいちゃんのばかぁーーーーっ！！」
うわーんとみっともなく大泣きしながら走り去っていく妹に何の声もかけられず、立ち尽くしていた。
「なんなんだよ・・・一体」
頭を軽く掻いていると、肩に少し大きな手を置かれた。
「いやー、青春ですな。二股は男の魅力かい？」
中島だった。意味がわからん。
「妹と誰を股にかけてるんだよ」
「わからないよ～？最近は妹でも『義』が付いちゃうと意外とギシギシアンアンな関係にもなるからねぇ」
「何の話してんだよお前・・・」
「ん？エロゲだけど」
平然としれっと言う彼に目を皿にしてしまった。
「昼間っから・・・。しかもリア充がやるゲームじゃあないだろ」
「ユーザーの現実など関係ないのだ！」

何かイケメンのくせにこいつも少し残念だなぁなどと嘆息して「あっそ」と肩に手を置き返し軽く返事をして昼食に戻るとした。
「むぅ～、妾との晩餐会を尻目にし、他のものと戯れるとは貴様もつくづく生意気になったものよ・・・」
結構憤怒している彼女の電波を着信拒否して、席に腰を落ち着かせ冷めない内に生ぬるい弁当を堪能するとする。
「あーはいはい、夜の宴は昼にしないよー。うーん、このだしまき卵超うめぇ！」
「うーー、妾を無視するとは不埒千万じゃ！！」
だしまき卵があまりに美味しかったので彼女の話に耳を傾けず、乱暴に頭をなでる。
「あぅ～、そんな行為で妾を手なずけたと思うな！ん～～、き、きもちいぃのだぁ」
満足そうなので一安心。
ともあれ、昼は騒がしかった。

この学校はなんと掃除などは生徒が担当せず、専用の従者を雇っている。
どんだけ金を持て余しているのだろうか不思議でしょうがないが6限目が終了し各々が行動を開始し蠢き出す。
「さぁ、我らが社(やしろ)に参ろうぞ！」
元気そうに鞄を持っていない片手を振り上げて駆け寄ってくる美少女とこの一般男児もその一人だ。
「あぁ、じゃあ行きますか」
「おーー！！」
そんな時ふと二人を呼び止める声。
「あー、御一行は神話研究部ですかな？」
意識してとてもイケメンボイスに仕上がった声が背後からする。
「何だ、リア充。妾は貴様などに用はないぞ。早(はや)に消え失せ貴様のペットと乳繰り合って来い」

露骨に不機嫌そうに腕組みしながら睨みつけるなぁ～、こいつ。
吸血鬼の威厳なのかこいつが不機嫌なときの少しドスの効いた声にはかなり迫力がある。
「いやー、ほんと、磯野君以外には冷たいなぁ～花沢さん」
まだそのネタ引っ張るのか。
あと、お前が花沢とくっついたんじゃなかったか？
「だ、だれがあのような薄汚いブス豚だ！！妾は高貴なる夜の眷属の王デルラント・シスキン・雅であるぞ！！」
「お前は原作者に謝って来い」
軽くチョップをいれて、彼女の暴走に歯止めをかける。
というか意外と文化に明るい吸血鬼。
「ははは、本と仲いいな。マジでカップルみてぇだよ。じゃ、俺も嫁と仲良くしてきますか」
「どこからカップルに見えるんだよ・・・」
結構本格的に嘆いてみる。
俺とこの究極美少女じゃ外見的に釣り合えないし、何より周波数の違いなどの諸所の事情で会話のキャッチボールができるかも危うい。
最近は出来るようにはなってきてはいるが、それでもまだ中性電波には不安が残る。
それに彼女は俺を従者及び眷属としか認識してないだろう、多分。
良くて友達だ。
僕以上友達くらいって関係だ。
「私と、悠は追うと眷属の関係なのだっ！・・・よくいっても、と、・・・友達なのだ」
ほれみろ、最後の方がごにょごにょ言って聞き取れなかったが、図星ではないか。
「はっはー、さいですか。じゃあ俺帰るな～」
前回同様手を振りながら飄々と立ち去っていく姿を見ながら鶸が叫ぶ。
「帰れー！もうくんなーー！」

肩をすくめ、笑っているかのような仕草を背中越しにして再び歩き出した。
「じゃあな、高村ー」
「おう、もう帰れ。もうくんな♪」
笑顔で俺も見送ってやった。
中島とは結構仲良しだ。

「ふぅ～、なんだか今日はとっても疲れたぞ・・・」
どっとたまった憂さを晴らすかのように乱暴にソファーに座りぎしぃと軋む音がする。
「いやまぁ、疲れたのは俺だって同じだし。同じ部員としていた痛みわけといこうじゃないか」
バックをそこら辺に放り、ポットで湯を沸かして今回はコーヒーを作る。
「ほれ、コーヒーだ」
「ん、うむ。ち、ちなみに聞くがこれは無糖か？」
何か恐ろしいものを睨むかのようにコーヒーとにらめっこしている鶸がかなり可愛らしく見えたがそれはおいておいて。
この反応から見て間違いなく無糖コーヒーを飲めないようだ。
「あぁ、わかんないからとりあえず自分の舌で確かめてくれ」
悪戯っぽく顔が気持ち悪くにやけたかもしれないが彼女の慌てる仕草を見れたのでまぁよしとする。
「では、いただこう。せっかく眷族が淹れたものだむげには出来まぃ・・・・」
恐る恐るカップを口に運びその黒い液体をちびちびと口内へと注ぎ込む。
そして案の定。
「むあぁーーーー！！にぎゃい！にぐぁいのだぁぁーーーー！」
コップは丁寧にソファーの前に置かれているローデスクにおいてそ

こら辺をのた打ち回っていた。
「貴様、妾をだましたな！許さぬぞ！」
舌を出しながらこちらを睨む鶸を横目に自分のと彼女のコップに少しずつ甘味料を追加していく。
「いや～、だって苦いの飲めないとは思わなかったし～」
俺の声色(こわいろ)が楽しそうだったせいか心底不機嫌そうであった。
「むむ～、いつかのそ首筋に噛み付いてやるわ・・・・」
どんな捨て台詞かわかりかねるものをはき捨てて甘くなったコーヒーを二人で堪能した。
「むぁ～、やっぱり甘い方が良いのだ～」
とっても和んでいる彼女のほっぺをむにむにと突付いてみたくなる衝動に駆られたが何とか自制した。

そんな日和の中。

「おい、そこの変態教師。いい加減和んでいる人間の付近で同人誌を読むのをやめろ。もしくは人間やめろ」
近くでずっと同人誌を堪能している変態がいたのがそろそろ堪え切れなくなってきているところだった。
「えぇ～、でも今日は昨日とは違って2次元の創作版だよ。コミケ79で買ったやつ」
堂々とアニメ調の半裸の少女が表紙の薄い本をこちらの提示してくるな。
「しるか！とっととしまえ！」
「これあれだよ、一冊1000円した今ネットで買うと3200円もする激レアものだよ。『俺の妹がこんなにも可愛いわけがなかった』の二次創作『俺の妹はこんなにも可愛かった』、超有名作だよ～。作画神なんだって～。ゆーたんも見てみ？」
ムカデのように地面を物凄い速度で這い、そのままソファーを挟み俺の後ろに回りこむ。

そして即座にホールド。
この人軍隊に属していたのかと思わされるほど素早い腕の関節技を決められた。
あぁ、鶸が目そらしてやがる。
「ほらほらー、ここ凄いんだって～」
余った片手で本を広げそのまま俺の目の前で開示される。
「ぶっ！」
何かあれなシーンだった。
しかも兄妹でやってる設定らしい。
「あらあら～、そんなガン見しちゃってぇ～。実はこういうの持ってる人？」
嘲る様な態度と妖艶な声で俺を惑わしてくる。
見るな見るな、俺はこんな奴の手には下らんぞ・・・！
「・・・・悠のエッチ」
あぁーーー！鶸様が凄いしらけた目でこっちを見てくる！ごめんなさい俺が間違っていました！
「さぁさぁ！欲情に任せてこれを読んじゃいなさいな！！」
ぐいぐいと本を近づけてくる。・・・・俺は屈しないからな！
そんな時、外から凄い大きな足音が走っていると思われるペースで鳴る。
そして豪快に扉が開く。
今朝のデジャブみたいだ。
「やっと見つけた、神話研きゅぶっ！」
反射してきた扉が勢いよく彼女の鼻頭を衝突させた。
縮むなよ、せっかく端正な顔立ちしてるんだから。
「うぐぅ～、痛い～、いたいよぉ～」
鼻をさすりながらこちらをゆっくりと見つめる視線が動く。
「・・・・・」
鼻をさすっていた本人は唖然としたのか、さすっていた手が重力に従いそのまま落下し、肩に掛けていたバッグまで落下した。

そして怒号の一喝。
「に、にぃ、ににいちゃんからはなれろぉぉぉぉぉぉぉーーー！！！」
妹こと高村悠葵の叫び声がとてつもない音量で配信された。
ともあれ、妹が推参してきてくれたお陰で、何とか同人誌の魔の手から逃れることが出来たのではある。
が。
俺が依然変体お姉さんに抱きつかれたまま同人誌をガン見し、ジト目で美少女に睨まれている状況を妹に見られているにはかわりなかったのである。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：３「妹、推参！（入部フラグ）」（後書き）

２０１１／１１／１４（月）修正。
改善の余地がありすぎて原稿が
まるっと変わりそうなのでこれ以上は触れないようにします・・・。

唐突だが、俺はただのロリコンなのかもしれない・・・。
ロウキューブとか見ちゃうよね。
ＴｏＬｏｖｅるだと美柑が最高だとか言っちゃうし。
でも理解者がいるはず！！！

そんな革新家の核心の第３話（０話からのカウントですので）は
お楽しみいただけたでしょうか？
そんな急展開とかはこれからもありませんので
暇なときにゆっくり読んで行ってね。

とある魔術の（ｒｙとか
中央公論新社のラノベみたいに
いろんな設定とかトリックみたいの伏線バンバン張りながら
書くのって無理なんじゃないかと思ってしまう俺の低能脳細胞群。
あんな作品も書いてみたい・・・！
あと、禁書目録（インデックス）がとりあえず可愛い。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４「部員が増えてしまったのだ・・・」（前書き）

妹って実際はどんな感じなんだろうね。
上にしか兄弟がいないからまったくもってわからない・・・。
そんなことはどうでもいいかな。
兎に角妹の回のはずなのに妹があまり出てきません。
う～ん、どこで間違えたのやら。
でも、一人一人をじっくり掘り進めるのもいいと思うので、
そっちの路線を取るつもりです。
最近の文章の拙いラノベとかだとすぐヒロイン何人も出てくるけど
それはないだろうと俺は勝手に思ってしまう。
ま、文章が拙いのは俺もだけどね！！！

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４「部員が増えてしまったのだ・・・」

「にいちゃんからはなれろっーーーー！！」
悠葵の物凄い音量の甲高い音声が絶賛配信中で部室にいる３人は皆顔を顰めた。
「あらあら、可愛いお譲ちゃんが一匹。私に食べられにきたのかしら？」
先陣を切ったのは変態代表の我らが顧問、江藤実智であった。
台詞まで完璧に変態である。
人の妹を勝手に捕食しないでくれ。
「おい、そこの変態！何でにいちゃんに絡まってんだ！」
指を勢い良く突き出し教師を躊躇なく指し示す。
教師の威厳がないからか本当にただの変態としてしか見受けられていないようだ。
「ツンのときの暴言も甘美なる味なのよねぇ～。ごちそうさまです」
どうやら残念な人間は会話のキャッチボールができないようだ。
悠葵が剣幕をそのままに部室の入り口から俺のもとに直進し、顧問の腕に齧り付いた。
「いやっーーーー！お肉が伸びちゃう！皮が伸びちゃう！！ごめんなさい！申しません！たまにしか！」
腕が変形するーなどと一人で勝手に囃し立てながら例のＡＶルーム（本来ならばただの物置）に逃げ込んだ。
ＡＶはオーディオビデオルームではない。
そして、たまにはされるのかと内心戦慄しつつも、ようやく解放されたので一安心。
「・・・・ふん！」
かなりご機嫌斜めな悠葵は教師に向かって露骨に嫌悪感を丸出しにする。
あの人の授業は成立するのか不思議である。

「さんきゅー、悠葵。お陰で寿命を無駄に縮めずに済んだよ」
頭を乱暴になでてやりながら謝辞を述べる。
いやはや、このタイミングで妹が来なかったら俺は果たしてどうなっていたのだろうか。
考えたくもない結果が脳裏を過ぎりまくるので思考中断。
「もぉーー！にいちゃん！何でこんなヤバンなところにいるの？！」
どうやらここを危険な所と判断したらしい。
強ち間違いではない。
自分の世界に見ず知らずの人間が入ってきたせいか、訝しげに鶸が悠葵を睨みつける。
「ここは俺の所属する部活の部室だぞ？ぎりぎりセーフな環境だ」
ほんとに何もかもギリギリである。
若干アウト気味でもある。
あの棚にあるＡ４の薄い本たちは全部同人誌だと知ってしまったので結構アウトな所もあるが・・・。
優に３００冊くらいはありそうだ。
「しかもそこにいる人一緒にお昼ご飯食べてた人だよね？！どうしてにいちゃんみたいなブサイクがこんな子と一緒にいるの？！」
何に憤っているのかわからないが俺が怒ってもいいのかな。
「にいちゃんは私の相談係なんだから毎日忙しいでしょ！こんな部活さっさと辞めなさい！」
矢継ぎ早に理由不明の発言が次々と発信される。
「おい、まて。童。いや、糞餓鬼。勝手に我が眷族を退部に追い込むでない」
人の妹を糞餓鬼呼ばわりとは・・・。
躊躇ねぇぜ！
「うっさいチビ！今私はにいちゃんに用があるの！子供は首を突っ込むな！」
先輩にも容赦なく暴言を吐くが、身長は二人とも同じくらいである。
兎に角どちらもおちびさんである。

でも鶸の方が何故だか大人びた雰囲気がある。
何故だかと思うのも失礼なのだろうけど。
「なっ・・・。貴様、妾を侮辱するとは・・・。奈落の煉獄へと誘うぞ・・・！」
お、今回は感情的になってもぎりぎりキャラを守った。
えらいえらい。
「レンゴク、・・ナラク？・・・むぅーーー！うっさいちび！難しい事なんか知らないの！黙ってろぺったんこ！」
これまた大差ないのではあるが言われてみると確かに鶸の方が凹凸に掛ける平坦なシルエットをしていた。
「えっ・・・」
そんなところに目がいってなかった様で男の俺がいるにも拘らず、自分でそれを包んで大きさを確認し、悠葵のそれを思い切り睨みつける。
「・・・・・。・・・小さくないのだ。・・・べ、べつにちっちゃくないもん！！！」
うわー、中1に高1が泣かされてるよ。最早同い年にしか見えないよ。
おまけに早速キャラが崩壊してしまっている。
「ふっふーん。牛乳飲んでないからそんなことになるのだ！ざまーみろぺったんこ！！」
語尾に現われた『ぺったんこ』に敏感に反応し、肩を震わせてその場にへたり込んだ。
目からは先ほどとは比較にならないほどの大粒の涙が溢れ、生気が抜けたかのように虚ろに口を少し開けていた。
「はいはい、先輩苛めはこれでおしまい」
軽く妹の頭にチョップを入れて黙らせる。
「う～、何てことするのさぁ～、にいちゃん。・・・って、そんなことより早く帰るの！」
まったく他人のことを考慮せずに俺の袖をくいくいと引いて部室か

ら出ようとする。
「おいおい、何で帰らないといけないんだよ」
「にいちゃんがロリコンに目覚めるから」
うわ、今回は正しい用法で使ってきた。
しかし、ロリコンという性癖は中年男性が発症するものであって、きっと俺はセーフだと信じている。
鶸を可愛らしいと思ったからということだけでそんな肩書きが付いてしまうのならば、実にいい迷惑だ。
「いやいや、同い年の子しかいないから」
悠葵は『ぺったんこ』によってことごとく塵灰と帰している鶸をまじまじと見つめ「うそだーーー！」と叫んでいた。
同じくらいの年だと思われていたらしい鶸はそこでまた着火され烈火の如くぴーぴー騒ぎ出す。
「お前ちっちゃいくせに生意気だぞ！！」「お前だってあんまりかわらんではないかっ！！」「うっさいぺったんこ！」「・・・うぅ、ぺったんこ言うな！このブラコン！」
「べ、べつにいちゃんの事なんかぜんぜん好きじゃないんだからねっ！」
悠葵よ、どこでそんなテンプレートな台詞覚えてきたんだ・・・。
どこまでも果てしない、鶸が好きそうな言葉で言うと悠久の傍(はた)から見ると幼児の口論にしか聞こえないのを止めるためにも、適当に悠葵を誤魔化して、怒り心頭の両者を引っぺがすためにも無理やり引っ張って部室をあとにした。

部活の帰り、学校の登校、たまに部室でこの日を境に悠葵が事あるごとに鶸に言いがかりをつけて例の如く若干微笑ましい本人からすれば邪推な状況に陥る。
昼食時、放課中、この時は鶸が悠葵に対して終始愚痴をこぼす。
とりあえず、俺は常々どちらかの悪口を聞くはめになってしまったのだ。

そして、吸血鬼（偽）と元気印娘が邂逅してから1週間後。
「お前みたいなゲロがにいちゃんの近くにいるから最近兄ちゃんは不良なのだ！！」
とんでもない言いがかりである。いつ不良になった。
「黙れ嘔吐物！貴様のような虚(うつ)け者が妾を愚弄すること許されると思うな！とっと帰れ！妾の神域に汚泥を塗るでない！」
お前ら二人とも全く同じ物なんだな。
「・・・ふふ」
中学1年生のくせにやけに下種の勘繰りを孕んだ様な笑顔を見せる。
それでも、もとがいいから可愛いのが悔しい。
「な、なんだ・・・」
態度の豹変に違和感と若干の慄然を抱きつつも警戒を怠らない鶸。
相手はお前よりいくつ年下か分っているのかな・・・。
「しってるぞ。お前みたいな痛い発言をする、もしくはやたらめったら熟語使いたがる奴の事を『中二病』っていうんだっ！」
またどうでもいい知識を詰め込んできた悠葵が鶸を攻める。
今の発言は鶸には効果抜群のようで顔を歪ませ、苦痛を露呈するかのような雰囲気を醸し出していた。
自覚あるんなら吸血鬼設定捨てちまえっつーの。
「ふ・・ククク・・・ククク。下賤の餓鬼には我が崇高なる言語が到底理解できておらぬようだな・・・。くくく、餓鬼道を彷徨うがいいわ・・・！」
最初の方で噎せつつ声が裏返りつつも健気にもキャラを保とうとする鶸に少し肩入れしたくもなったが、子供の喧嘩は大人が介入しても再戦が決行されるのが目に見えているので見守ることにする。
子供の頃喧嘩っ早い奴たまにいたよなぁ、などと懐古しつつ。
「うわ、中二病！いたーい！この子いたーい！」
「・・・・・・・・」
「ちゅ～に～びょう～。ただの痛い子～♪」

囃し立てるかのような音程のちぐはぐな歌を奏でる。
外見的特長はまるで同じくらいの年齢だと錯覚させるが、実際は3才くらいの差があるのだ。
厳密に言うと鶸の方が醸し出す雰囲気はかなり大人びたものがある。
・・・にも拘らず。
俯きながら肩をわなわなと震わせている。
そのまま進行方向を見もせずに正確に俺のほうに早足でずかずかと近付いてくる。
俺の袖を掴みながら、
「き、・・きさまの愚妹を何とかしたらどうなのだ?!いや、何とかしてください!お願いします悠さま!!」
袖を弱々しい力で前後に振り回そうとしながら全力過ぎる懇願をしてくる。
「おいゲロ!にいちゃんに近付くな!」
「うるさい!こやつは我が眷属であり、貴様のような嘔吐物のものではない!!」
「ふぐぐ、ゲロ女のくせに生意気だぞ・・・!って、いい事思いついた!!」
今にも跳びはねんとするような嬉々とした顔でこちらをしたり顔で見据える。
「感謝しなさいゲロ女。私が入部してやるのだっ!」
「どこにも感謝する要素が微塵もないわっ!!」
全力で叫ぶ鶸。
妹が何を考えてこの部に入部するなどと言い出したかは不明だが、鶸が「妾はあのような小娘を認めぬ、認めぬぅ〜!!」とずっと唸っていた。
因みにそのとき助け舟を出して入部させるように喚起したのは俺だ。
これで毎日騒がしいかもしれないけれど、毎日顔を会わせていればいつかは仲良くなるだろうと判断を下したからである。

「ふぬぅ～、こんな形で部員が増えるとは・・・・」
「まぁ、そんな僻むなって。仲良くやってあげてくれよ」
悠葵が入部届けを提出して3日ほど経った時のランチタイム。
「だって、貴様の妹がわた、・・・はぁ。私のこと馬鹿にしてくるんだもん・・」
あーあ、諦めちゃった。
「いや、まぁ・・・。それは俺の方もきつく言っといたけど、相手は中1なんだし、ここはどうか穏便に」
「えぇ～、見返りないしぃ～」
台詞をただ現国の教科書に記載するかのように表示するといかにも一世代昔のギャルのように感じるが、実際の彼女の口から発せられるのは子供が駄々こねているときの声音に物凄く近くて可愛くてしょうがない。喋らなきゃ凛とした感じのお嬢様感があるのに喋るとても幼く見えてしまうのも一種の魅力なのかな。
はっ！これは一種のギャップ萌え?！
「・・・？顔に何か付いてる？」
「・・はっ！い、いや、何でもない。・・て何の話してたんだっけ？」
どうやらじっと眺めていたらしい。鶸が可愛いからとこじつけて納得。
「悠が私にラノベ6冊くらい買ってくれるっていう約束云々っていう感じ」
会話をしている最中に会話の内容を忘れるなどという老後にしかありえない失態に少し焦ったがどうやら俺はこいつに４０００円ほど貢ぐことになっているようだ。
「あー、まぁ、妹のことで迷惑かけちゃったしなぁ～。よし！男に二言はない！今度一緒に行くか！」
４０００円という額に少し二の足を踏んでしまっていたが、意を決することにした。
「えーっと、その、・・・あの、ぅぅ、・・あぅ」

なんだか煮え切らないような曖昧な態度である鶸が不思議で俯いている彼女を覗き込もうとするとびくっとして顔を背けられた。

・・・知らぬ間に嫌われたのかな？

あぁ、現実はフラグの回収が難しいよ～。

鶸に嫌われたと理由も分らぬままに思い込み傷心感傷に浸りまくっていて鶸と共に俯き箸が止まった。

そんな時、救いの声が天からする。

明確には俺の頭上からだ。

アバーブ・マイ・ヘッド。

「二人とも内心を素直に外に曝け出すねー。斎垣ちゃんも言って後悔するくらいなら言わなきゃいいのに。あと、高村凹み過ぎ～。露骨に凹みすぎて逆に引いちゃうぜ」

軽い口調、尚且つ躊躇を知らない発言をする輩を見る。

「あぁ、エロマンガ島か。現実にはどうして吹き出しが出てきてオートセーブの確認とかしてくれないのだろうか・・・」

鶸に嫌われてしまったことが一番響いてしまっている俺には中島など眼中になかった。

「エロゲやってるからって、そんな実際に存在する島の名前で読んで欲しくはないな。因みに中島です、どうも」

「知ってるよ。・・・はぁ、リア充め・・・。忌々しくて目から涙が出てくるわ」

「ちょっとお前たちの会話聞いてたけどお前なんで会話の途中で会話の内容忘れるんだよ。もう更年期障害に入ったのか」

けらけらと笑う中島。更年期障害は女性の患うもんだぞ・・・。

そんなことすら突っ込む気力がなかった。

「何で俺の内心が読めるんだよ・・・」

「ふふふ、こう見えても読心術２級だからな！」

でも一つだけ突っ込んでおいた。読心術に進級試験なんざあるのかよ。

そこで多少雑談を交えつつ鶸との会話の齟齬が発生する直前の内容を教えてもらい、事実を知ることに成功した。
「まじで？！そんな落ちなの？！」
「ははは、嫌われてるんじゃなくて良かったな・・・」
若干俺のテンションに引いている中島なんかは置いておいてとりあえず俺は元気になった。
これでは先に中島に嫌われそうだ。
「うぅ、何か申し訳ないことした気がするのだ・・・」
「もうそんなことどうでもいいからさっさと飯食っちゃおうぜ、鶸！」
鶸の作ったお手製弁当を貪り、味を租借して何度も堪能する。
あー、鶸の弁当ほんと美味いなぁ～。いつかリア充になったらこんな嫁が欲しいぜ～。
鶸を見ると顔を真っ赤にしながら指をもじもじとさせているのがまたこれが可愛かったが動機は不明であった。

中島から部室に行く前に聞いた事だが鶸の弁当をべた褒めした俺の心の声は実際の音波として発信されていたらしい。まぁ、悪い事はしていないだろうとこれもこじつけて納得。
そんなこんなで我が妹、高村悠葵が入部した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：４「部員が増えてしまったのだ・・・」（後書き）

しばらく新作投稿することはないと思います・・・。
暇人にも暇人なりの仕事があるようです。
くそ、辛いぜ・・・。
次回の投稿はおそらく１２月に入ってからだと思います。

余談すぎる駄弁り。
この時期になると寒くて異様に早く眠くなります。
なんでしょう、冬眠でもしたいのでしょうか（笑）

では、
次回も期待してくださる人がいるとデスクトップの前で万歳してしまいます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５「高村悠の一日と立ち込める暗雲」（前書き）

次回のアップは１２月とかほざきながら書いてしまっているが反省はしてません。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５「高村悠の一日と立ち込める暗雲」

妹が入部して部員３名、顧問という肩書を持つ変態を含めると４名の神話研究部。
そこに所属して数週間が経過して。
学校に入学してからは１か月ほど経過している。
教室内が何か騒がしいが耳を傾けることはしない。
「あー、めんどくせぇー」
「なにーがー」
例のリア充の巣窟になっている天窓の設けられている場所に足を向けゆったりと中島とふらついていた。
「あぁー、その問いに答えること次の体育～」
「もぅこたえてぇ～る～」
３限目。
ぽかぽか陽気の倦怠感が加速度的というか瞬間的に最高点に達し、体育の授業が億劫でしょうがなかった。おまけに持久走とかこのテンションでは拷問でしかない・・・。
たかが１０分程度の放課中であるにも拘らず、２，３組のカップル共が騒いでいる。
死ねばいいのに。・・これは言い過ぎか。爆ぜろ！！
押し並べてあの類の人間は無知蒙昧に見える。
これはただの嫉妬なのだろうか。僻みねぇぜ。

更衣室にたどり着き、中島が周りを一瞥しながら腐女子歓喜ｗｗｗとか言っていたのはスルーした。
右から左へ馬耳東風～。蝸牛殻よ働くな～。

走る。兎にも角にも走る。
ラジオ体操などを形式的に雑多に済ましてから校内時間いっぱい、

すなわち概ね１０周させられる羽目になるのだ。
ただいま3周目。
中島が俺のペースに合わせて時折呼吸音が混じった聞き取りづらい台詞を発する。
「あぁ～、妃毬(ひまり)ちゃ～ん、僕もぉ疲れたよ～」
「黙れ、リア充。未来永劫消え失せろ。それは俺に対する嫌がらせか？」
「おまっ！・・・はぁはぁ、さ、酸欠。・・画面越しで直(じか)に逢ったこと一度もない俺のこの遠距離恋愛に対して更なる追い打ちをかけるのか？！」
酸欠とかほざきつつも後半の台詞はものすごい血相で口早に言ってたぞ、中島。
「あぁ、はいはい。辛いね。画面越しじゃ逢瀬はできないもんね」
「ほんとだって～、ごほっ。む、むせた。と、とにかく！昨日、翔(しょ)真(うま)っていう男に寝取られたのが悔しかった！！」
よくもまぁ、そんなぬけぬけと泰然とそんな発言できるなぁ。
「そもそもお前の女は現実(こっち)世界に3次元体として存在しているだろ～」
つーか、エロゲやらない人に対してその方面のネタを使うなよな。
まぁ、中島だから許すけど。
「それはそれだし～。・・・走るのはぇよ、おまえ。もう、無理」
あ、中島がペース落として根を上げだした。
こういうのって1回ペース落とすと足に乳酸溜まったの物凄く知覚しちゃって余計に疲れるのに。
「おいおい、『俺最後までお前とは知りきったら、嫁に逢いに行くんだ・・・』って言ったの忘れたのか？」
「あ、あれ、ただの死亡フラグ・・・」
「はぁ、まぁいいけどさ。俺も十二分に疲れたし」
まぁ、折角のこの学校初の男友達である中島だからな。
ある程度は寛容になるさ。

「今のお前の心情を当ててやろうか？」
この学校はやたら資金が潤滑なようで無駄に敷地も広く、中等部との合併が決まってからそれに更なる拍車がかかったようで、噂では敷地面積が近くの県立高校の倍ほどあるそうな。話半分とは言うけれど、そう言いたくなるほどの大きさを有しているのも言わずもがな然りといったところである。
それゆえ、校内を走るルートは１ｋｍになるように想定されているが、脇道に逸れれば教師の目を盗んでいくらでも休憩できる。体育の教師が思いの外適当（俺らのように気だるいのかな）なのでサボっている輩は所々で見られた。その輩の一部と俺らもなったわけだ。
「ふ～ん、あてられるなら？」
中島ほどは息が上がっていないので軽く深呼吸しながら、中島がへたり込んでいる隣に腰を下ろす。
「俺のことを慮（おもんばか）って、俺のために一緒に休憩している。すなわち、俺のことが好きなんだろ？」
したり顔というかイケメン成分で鬱陶しくはないがこちらはいらっ☆とさせるものがある。
「やべぇ、図星来たんじゃない？」
少し楽になったのと共にテンションが上がっているらしい中島とは相対的に俺のテンションは下落。
「はぁ、あほなの？馬鹿なの？死ぬの？」
「・・・・おぉう。真顔で言われると迫力あるねぇ」
まぁ、お前を慮って一緒にいるのは事実だけどな。
「何か、男二人だけでこんな所にいるときっと腐った女の子はきゃっきゃうふふなんだろうな」
「・・・・よし、全力で走ろうか」
「えぇ～～～」
それから3分ほど雑談猥談を交えてから教師がほかのサボっている奴に怒号を発しているのが聞こえたのでコースに戻ることにした。

昼食。
いつものようにぴょこぴょこと鶸がこちらに走ってくる。
授業中などはむすっと尚且つ凛とした雰囲気であるのにも拘らずここまで変容するのだから大したものである。
「ザ・ランチタイムなのだ！我が眷属よ！」
前の席の子の椅子（因みにその席は小柄で気弱そうな男だ）を勝手に拝借する。
最近はなんか鶸さんが座ったぞ、お前ずるいなぁ、役得役得～などと妄言を吐いている輩が少しずつ出ている。ちょっとそれは悪寒が走るぞ・・・。
そして今日も豪勢というと少し違和感がある特上の真心のこもった弁当が披露される。
むむ、今日は少し肉が多めな気がする。美味そうだ。
「まだその設定続けるのか？」
「くくく、なんだ設定とは、貴様の発言は妄言に聞こえるぞ」
「はいはい、じゃあさっさと食べましょうねー」
「くぅ～、妄を無視するでない！」
う～ん、たれが絡まったこのお肉もなかなか上出来だ。
「今日は体育が馬鹿みたいに疲れたからなー。腹減ってしょうがない」
「そ、そうか。童も人間の御遊戯に付き合ったせいで若干疲れたのだ」
何故だか俺をちらちら伺ってくるのだが、それは置いておいて。
「へぇ～、で女子は何やってるんだ？」
「ふ、ふぇ？！・・・えーっと・・・ひ、ひみつ！」
「何故に隠す必要があるのですか、吸血鬼さん・・・」
「と、とにかく秘密なのだ！我が眷属ならば妄の指示に従順に従っておればよい！」
ここまで強情に隠す必要性が微塵も感じられないが、ここで食い下

がっても埒が明かないので俺は折れることにいた。
「あーぃはい、そうだねー大変だったねー」
「え、き、気にならない、のか？」
今度は急に話の腰を折られたわけでもないのに不服そうで恥ずかしさ（なぜ？）を孕んだかのように上目遣いで見てくる。
全く表情の変化が激しい奴だな～。はぁ、まったく。
かまってやりたくなるじゃねぇか。
「じゃあ、もう一回だけ聞こう。鶸さんは何を体育でしましたか？」
迷子になった幼児をあやすデパートの店員さんみたいな口調になったがそれは気にしないでおこう。
「え、えへへ。えっとね」
聞かれたことが嬉しいのか頬を少し紅潮させながらはにかんだ。
くぅ～、可愛いぜ。
「今日は体育館で籠球（バスケットボール）という人間の遊戯を興じていたのだ！」
いいなぁ、バスケ。走るのより絶対そっちのほうが楽しいじゃん。
でもこの吸血鬼に球技の才能は見込めない気がする。
ただの直観だけども。
「どうだった？お前のチーム勝ったのか？」
くくく、といつもの如くあまり意味のない含み笑いをして間を十分とってから大仰そうに口を開いた。
「妾の大活躍が功を為してか9点も差を開いて勝ったぞ！」
へぇ、以外。俺の直観あてにならないな。
「どんなプレーをしたんだよ？」
ここでさっきと同じ、たれに絡めてある肉を口へ運ぶ。
「妾の究極的な存在の力を用いて空間を歪め立っているだけでも僕どもが怒涛の籠（ゴール）への放射（シュート）に成功しておったぞ！！」
訂正。俺の直観まだ信頼できそうだわ。
あーあ、残念なやつ。そして肉がうまい。
舌が肥えてきているせいか、最近はコンビニ弁当がまずくてしょうがない。

「・・・そっか。お前も大変なんだな」
「・・・うん。正直同じ舞台（フィールド）に立っているのが辛かった。だから精神的に若干疲れたのだ・・・・。終わった後更衣室でちょっと泣いたし・・・」
ほんと辛かったみたいだな・・・。
俺は肉体的、彼女は精神的疲労をため込み、疲弊しきっているので互いに傷跡を舐めあうことにこの放課を使おうと決めた。
「まぁ、人生いろいろだ。きっとこれから多少はいいことあると思うよ」
そう言いながら机を挟みすぐ目の前にいる彼女の柔らかい頭を撫でて傷心になぜか二人とも浸っていた。
俺も一時期そういうことがあったからなぁ。
中２のとき、クラス変わってから知り合いが一人もいなくて最初の３か月ずっと孤立していたことがあったからその気持ちは分からなくもない。
「・・はぁ、我が眷属よ、感謝なのだ・・・」
そんな物凄い気落ちし淀んだ空気の中の昼食であった。

５限目。
日本史。
一言で言っておこう。
眠い！！！
教師の言葉がどうしてもの鼓膜を振動していないように感じる。
ただいま先史時代のことをやっているのだが果たして黒板に書かれている遺跡の絵はなんなんだろうか。
それでも寝まいと心を鬼にして毅然とした態度で挑もうとしてみたのだが、青ペンがノートの罫線を無視してぐいぐいと不可解な方向へ侵略を進めていく。
あぁー、ノート直すのめんどくせぇ。もぅ、いいやしらん。寝る！！
わたくし、高村悠は結局開始１３分でログアウトしてしまった。

６限目もあまり記憶に残らず、なんの授業だったかも今は忘れかけてしまっている。
因みに今は帰宅前、部活前といった理由で生徒のテンションが人によりけり上下してそわそわしている時間帯。ざっくばらんに有り体に言っちゃえばＳＴ（ショートタイム）という連絡事項などを教師がする時間である。
結果から言えばこのＳＴのお蔭というかせいで目はパッチリ覚めたというか脳細胞がメキメキと焦燥感に駆られ絶賛稼動中である。
その教師の言葉をありがたく脳内で反芻するとしよう。

「あー、２週間後の月曜日から４日間テストやっから。知ってるだろお前ら？年間予定表見てるんだったら知ってると思うが、知らん奴にはここで言っとく。来週１週間は考査週間として部活を中止して勉強に時間を当てさせるから。まぁそこら辺はどこの学校とも変わらんからそこんとこよろしく。最初のテストだから出題傾向とかわからんだろうけど、んなぁもんは気合で乗り越えろよな。じゃ、以上。また明日ー」
この言葉の後、椅子がガラガラとざわめく音とともに何人もの奴らが騒ぎ合っていたがそれどころではない。
今まで暢気に部室でダラダラ過ごしていただけなので勉強とか皆無でした。
これはピンチだ。
どうしてここまで焦ってるかって？
そりゃあねぇ、ここの学校の鉄則を知らないからそういえるんだよ。
ここの校則とは別の鉄則という部分が生徒手帳に乗っている。
その部分だけ抜粋するとこうなる。
『学年順位が全体の５％以下の成績の者は退学と処す』
只今、一年生は４５０名。
つまり２０名弱の生徒が退学になるのだ。

この学校のテストの回数から考察すると最終的に卒業できる人数は２００程度になる。
これで俺の焦燥感を理解していただけたかな。
この無理矢理な鉄則のお蔭で底辺の生徒の実力もぐいぐい上昇するので実際、退学になるものはほとんどいないらしいがそれでも実力に変化のないものは実際に首を落とされるらしい。
今のところは焦燥感というよりかは焦慮に近いのだろうけど、それでも一度怠慢に浸ってしまえば高校中退なんて言う凄い看板を引っ提げること必至である。
この御時勢その看板は重すぎるので何としても回避したいものだ。

そんなこと言っておきながら部室で鶸の所有物であるラノベを読んでいる俺がいる。
・・・だって、他の女子に嫉妬されるほどの可愛い子が可愛い笑顔見せてきたらしょうがなくないか？
最近、鶸にダメ？って首を傾けられながら見られると断れなくなってしまっている。
これは一種の魔法なのだろうか・・・。
これも不安要素の一つとして予想していたからあれほどに焦っていたのだ。
因みにこれは全１０巻のラブコメものであるのだが、なかなか面白い。
ヒロインのやたら髪の毛やらが派手な色をした子の喜怒哀楽の変化を眺めているのも楽しいものである。
・・・・ついついにやにやしてしまう。

鶸に唐突に尋ねてみる。
何せ知りあってからそこまで日が経過していないため互いの認識があまりできていない。

「なぁ、お前テスト対策しなくても大丈夫なのかよ？」
「くくく、たかが人間の生み出した知識など海よりも深い深淵の知識を持つ妾は他愛のない事よ」
あーはいはい、そうだね。
でも鶸が退学とかしたらものすごく寂しいと思ってしまう自分がいるのも事実なようで。
「じゃあ、俺は退学になりたくないし、今日はもう帰るわ」
こんな雰囲気を醸し出せば彼女も勉強してくれるという策略的な台詞を発した。
けれどこのおっせかいな心配は将来的には杞憂となってしまう。
それならまず自分の心配をしな変えればならなかった。

ぱたんと心地のいい音を本が奏でる。
それを本棚に姉妹鞄を拾い上げ帰ろうとするときだった。
「だったら、こ、ここでしていけばよいではないかっ？！」
何なんだろうか、時折彼女の行動は些か動機がわからない。
「いや、でもきっと唸ったりするから多分に迷惑だと思うぜ？」
「な、なん、なら私も一緒に付き合ってあげるのだ・・・」
おぉー、リア充展開。
相手が吸血鬼だから多少残念だけど見た目は類を見ないほどの美少女なので大いに嬉しい。
「こらー！！ゲロ女！にいちゃんをたぶらかすんじゃなぁぁーーーいっ！！」
すさまじい音とともに扉が豪快に開き悠葵が部室に入る。
これで部員は全員そろった。
そのせいでとても騒がしくなり、とても部室では勉強できそうになかった。

そんなこんなで相も変わらず騒がしいなか、刻々とテストの日はこちらに忍び寄ってきた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ：５「高村悠の一日と立ち込める暗雲」（後書き）

毎回の如く誤字脱字がありましたら連絡とかしてくださると助かります。
投稿する前に３度ほど軽く読み直しているのですが
それでも見落としがいくつもあるようなのです。
悠ではありませんが、眠いのでしょう・・・。

それと謝辞。
予想外にも見てくださっている方がいるので
自分としては嬉しくてしょうがありません（＊^＿^＊）
これからもどうかご寛容によろしくお願いしますね♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4113y/

俺の教室には吸血鬼（偽）がいる

2011年11月20日04時59分発行